

ハワイセミナーを通して

宮城県
東北学院大学三年

高橋 佐和

このハワイセミナーのお話をいただいた時、まるで夢のようなお話を最初は信じられませんでした。というのも、宮城県からはハワイセミナーに参加した学生は少なく、まさか自分の大学がご招待いただくとは思っても見なかったからです。そのためこの貴重で素晴らしいこのセミナーに参加できるということがどんなに有り難いことか、噛みしめながら、このセミナーに参加しようと強く思いました。

出発する前まではとても不安でした。私のような者が参加してもいいのか、一緒に参加する学生達と仲良くなれるのかなどの不安も含め、海外も初めてでしたので、とにかく全てにおいて不安を感じていました。しかし当日になってからは本当にあつという間で、それまでに感じていた不安は一瞬にしてなくなりました。そして、セミナー期間中は学ぶことが多く、ワクワクとした気持ちで過ごしていました。

まず、一つ目は、みどり会の方々との出会いから様々なことを学びました。みどり会の方々のお茶席に入らせていただいた時は、茶道は世界共通なのだと思身を持って感じ、大宗匠の仰る「一盃からピースフルネスを」という言葉の意味を噛みしめることが出来ました。

正直私は、茶道といえば日本、という固定概念のようなものがあつたのですが、茶道は世界共通のツールなのだと思ふことが出来ました。

二つ目に、現地でしか学べることの出来ない知識を学びました。初日、みどり会の方々のお茶席に入り、先ほど述べたような「一盃からピースフルネスを」を学びました。そして二日目・三日目と、大宗匠をはじめとする素晴らしい方々の講義を聞くことが出来ました。勿論、茶道実技研修での大宗匠様の解説では、一言ももらすまいと必死にメモをしたのを覚えています。

三つ目に、ハワイで過ごす毎日でハワイの文化を学びました。勿論茶道が第一のセミナーではありましたが、その八日間のスケジュールには多くの自由時間がありました。なぜこんなにも大宗匠様は自由時間を与えてくださったのか、そう考えた時、ハワイの文化やハワイの人々といった「ハワイ」自体を体感して欲しかったのではないかと思いました。以前の私は、ハワイに対して、きれいな海、暖かい気候などに対する漠然とした憧れがありました。しかしこのセミナーに参加した今、言葉に表せないほどのハワイの素晴らしさを学ぶことが出来ました。それはゆっくりと流れる時間であったり、現地の方々の寛大な心だつたり、茶道に通じるものも感じました。

四つ目に、「一期一会」を学びました。このセミナーを通して、普段交流することの出来ない方々と出会えました。県内の茶道の先生方や同じ茶道を学ぶ学生とは交流することはあっても、他の県の方々との交流はそれほど活発ではありませんでした。それが、ハワイで日本各地から参加された方と素晴らしい一期一会を経験出来ました。それは、茶道をしていなかったら経験することの出来ないこと

であり、「茶道」を通しての出会いの場でした。このような機会を与えてくださった皆様に、心から感謝致します。

このセミナーに参加させていただくに当たり茶道に対する作文を書きました。その時は、茶道を学べたこと、それを通して色々な機会に恵まれたことに対して、自分の恩師や、先輩、一緒に学んできた仲間の皆に感謝の言葉を述べました。その気持ちはこのセミナーを通してより一層強いものとなりました。そして何より、このセミナーという機会を与えてくださった大宗匠様をはじめセミナーをご準備等してくださった皆様に、改めて感謝の言葉を述べさせていただきます。

本当に、有り難うございました。

私にとっての茶道と言葉

東京都
お茶の水女子大学二年

江里口 瑛子

言葉は架け橋である。私と人とを結びつけ、私と物との対話を可能にし、そして新たな自己発見をもたらしてくれる。

言葉は発話されたり、文字の形で示されたりする。耳に届き、目に入って理解され、何らかのイメージを与え、世界を創造する。言葉は私を感化し、応答を促し、新たな行動のきっかけをつくる。このようにして、言葉は私の日常の時空間を充実させ、彩り、あたかも空気の如く、私の生にとって絶対不可欠のエレメントとなっている。しかし、それだけに改めて言葉をそれとして意識することはほとんどない。ところが、茶室において見聞きする言葉は、妙に気になったり、理解できず不安になったりすることがある。言葉の異化作用を強く意識させられる。

先日のハワイセミナーにおいて、掛軸の書を前にした時のことである。私は呆然として佇んでしまった。その書は草書体で書かれており、私にとっては文字の体を成しておらず、すぐには判読できなかったからである。「これは何！一体何なの？」脳裏をよぎるのは疑問詞ばかりで、目の前の言葉が空虚に映るばかりであった。私の灰色の脳のデータベースを検索しながらじっと見ていると、しばらくしてヒットするものがあり、何とか見えるようになってきた。「明

歴々露堂々」と読めた。しかし、それで意味の充実が得られたわけではなかった。

次いで、その書の墨がおりなす白黒の空間布置の印象が気になり私の心をとらえた。最初の一文字目の「明」は、文字通り解すれば、「明るい」とか「明らか」といった意味を表している。意味論的に「明」という文字は「明るい」ことを意味する単なる記号に過ぎず、その記号の意味作用からすれば、文字「明」は物理的な明るさを放つ必要はないはずである。にもかかわらず、この書の「明」は明るい光に包まれ、いかにも明るいと感じられた。否それどころか、事実、「明」という文字そのものが明るさにまどわれていたのである。文字「明」を中心に、全体がまるで明度を上げる技巧が施された印象派の絵のように見えてきたのである。

このような不思議な感覚に浸っていると、傍に居た人が次のようなことを言った。「つくりの月がやや長く下向きに伸びているので、『明々』と読むこともできそうですね」と。なるほど、つくりの月の一筆書きの草書部分が倍以上に長く引き伸ばされており、いわゆる踊り字のノマ字「々」の如く私にも見えてきた。「明々」と読んでみると、背景の余白の部分がその分増えて見えるようになり、そのためか、ますます明るく見えてきた。

すると今度は、私の隣に居たみどり会のある方が、つくりの月について更にこんな風に言われた。「下へ向かって伸びている様はまるで光が走っているようですね」と。青天の霹靂だった。筆の墨の軌跡に光が走るのが見えた。一瞬、私は戸惑ってしまった。筆の軌跡は黒色そのものであり、古典物理学者のニュートン風に言えば、黒色は光を吸収するだけで、光を放つことはない。それ故、墨の部分

に光を見るということはあり得ないからである。しかし、私にははっきりと光が見えたのである。発された言葉に促され、言葉の創造作用によって、墨の黒い軌跡に光を感知したのである。

様々な言葉やその印象が脳裏をよぎっていくにつれ、私の中ではんやりと書全体の意味のニュアンスが形作られてきた。勿論、その書に込められた意図や世界観の正統的な解釈を知ることができれば、理解はより深まるだろう。しかし、そのような場合であれ、私の理解力の範囲で解するほかはなく、決して私の解釈の域を出ることはないだろう。ありがたい説明や解釈を伺っても、それは私と等身大の理解や解釈へと変容されてしまう。いわゆる「等しきものから等しきものへ」である。私は、自身の言葉の限界の内に留まるしかないのである。してみれば、私は他者の言葉に意欲的に耳を傾け、自分の印象を大切にし、自分なりの理解や解釈の世界で遊び、享受するしかない。だからと言って、そこで自己完結し、一人善がりであって良いものではないだろう。私は、常に開かれた心を持つていたいと思っている。というのも、人の本質は「生成」であり、それは「共に生きる」ことの内にあり、私は考えているからである。他者との交わりやコミュニケーション、物や自然との交感、自分自身との対話、こうした出会いを通して私は変容し、ますます私らしくなっていくのである。

翻って、普段の私はせわしない日常生活を送り、忙しさにかまけ、出会うものに対して心を込めて相對することをつい忘れがちである。しかし、この見失いがちな一期一会の時空間を改めて創出してくれるのが、私にとつての茶道である。茶室の空間は独特の表情を持ち、茶室の設えの様子、静謐の中に響く松風の音、亭主の所作、一碗の

お茶をおしいただく姿、吸いきりの音、掛軸や花入等の調度品や道具に至るまで意味を投げかけ、呼びかけている。心を開き無心で相對すると、呼びかけの言葉が聞こえ、目に見え、体感される。その呼びかけの言葉が架け橋となつて、心の内で対話が生起する。そして、誰彼ともなく、言葉が発されるやいなや、対話の輪が茶室全体に広がっていく。あの「明歴々露堂々」の書を前にしたときの一席がまさしくそうであった。私は亭主の意匠と心遣いに感じ入り、しばしその心地よさに身を任せるばかりであった。ゆったりとした時間が流れ、まるでダリが描いた「柔らかい時計」から針も文字盤もすっかり消えてしまい、時間意識から解き放たれたかのように感じた。心が癒されると同時に、明日への創造の活力を得たような思いがした。

茶室は様々な意味を発している。調度品や道具でさえ意味を発しており、無心に臨めば、その意味をまとつた言葉を聞き分けることができる。加えて、相席した人たちと交わす言葉、亭主の心づくしの言葉、これらの意味ある言葉が架け橋となつて、私は改めてそれらの存在や人格の重みを意識し、自ずと敬意が生じてくるのを感じる。感覚が研ぎすまされ、そこに新たな自分を見いだす。新生の悦びを体感するひとときである。言葉はまた、未来の私への架け橋にもなりうるのだ。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーで学んだこと

愛知県
名古屋大学三年

味岡 恵

この度は、第三十八回裏千家ハワイセミナーにご招待いただきました。この度は、第三十八回裏千家ハワイセミナーにご招待いただき、様々な事を学ばせていただきました。ハワイと言う異国の地だからこそ、学べた事が沢山ありました。

招待学生として参加させていただき、様々な事を学ばせていただきました。ハワイと言う異国の地だからこそ、学べた事が沢山ありました。特に、今年度は裏千家学園茶道専門学校の外国人研修コース「みどり会」が、創設四十周年を迎えられたことから、このセミナーに併せて、世界各国より同窓生が集われて「みどり会同窓会」が、ホテルにて開催されました。私達は、みどり会同窓生主催のお茶会に特別に参加させていただきました。

床は大宗匠様筆「斑々緑草」の一行で、茶杓は大宗匠様作「友の和」でした。御軸の通り、水辺に緑の草々が生き生きと交わっているように、世界中の文化が地域・人種を越えて和が広がっていることを感じました。

ロシアの香合や、アメリカ・ロスアンゼルスアイボリーウッドの木で造られた薄茶器がありました。他のお道具も、世界各国から集められた、国際色豊かなお道具の取り合わせでした。

また、蓋置は大宗匠様によって地球の東西南北に架けられた「架け橋」を象徴するものでした。この蓋置の作者は、ニューヨーク生れで、一九七九年〜一九八〇年にかけて「みどり会」で学ばれたリチャード・ミルグリム氏の作でした。ミルグリム氏は一九八五年に京都府北部に、大宗匠様をご命名された利茶土（リチャード）窯を築窯されました。

この創設四十周年「みどり会同窓会」のために、アメリカ・マサチューセッツ州の赤土にルティール釉を施し、二〇〇四年に大宗匠様にご命名いただいた「今古窯」で焼成されたこと説明されました。今日庵で茶の湯を学ぶ機会を得られた数百人のみどり会同窓生によって、世界中に広げられた文化の架け橋を強く感じました。

このセミナーの団員全員に、この「架け橋」の蓋置をいただきました。ハワイセミナーの思い出として大切にさせていただきます。この茶会は、ハワイ出張所内にある「汎洋庵」で催されました。説明によると「汎洋庵」とは「広い太平洋に浮かぶお茶室」という意味だそうです。今、大宗匠様によって架けられた「架け橋」により結ばれ、世界の文化が一つになってこの庵に集まっていることを感じました。

みどり会の方とお話しさせていただく機会もありました。私がお話しさせていただいたみどり会同窓生の方は、自分の国の文化を学んでから来日されたと言われました。その上で日本の茶道を中心とした色々なことを総合的に学ぶことが出来たので、自国文化との比較から茶道の素晴らしさが良く分かったと言われました。

世界各国から集われたみどり会同窓会の方々が、このお茶会をいかに大切にしてみえるかを感じました。

お世話になった皆様、本当に有り難うございました。

私は国際化が進む現代社会では、外国語が出来る説明文としての「言語」のみでなく、まず自分の生まれた国の「心」を学ぶことからスタートすることが必要であり、そして自国の「心」を学んで何を伝えるかこそ、他国の「心」を理解するために必要であると教えられたように思います。

大宗匠様は『一盃からピースフルネスを』の信念を持って海外への茶道普及をされたことや、言葉が通じなくても、努力すれば理解し合うことが出来ることなどを教えていただき感激しました。

大宗匠様が、海外への茶道普及を始められたハワイの地にご同行させていただき深い感動がありました。

茶道は長い伝統を持った、日本を代表する総合文化です。また深い精神と哲学を持った総合芸術でもあります。日本の文化や芸術の「心」を学ぶとき「茶道」は最適である、ということ異国の地ハワイに教えてもらった気がします。

私は、これからもハワイセミナーで学ばせていただいた「心」を大切にしたいと思います。

鵬雲斎大宗匠様ならびに坐忘斎御家元様に言い尽せない程の感謝の気持ち一杯です。

裏千家淡交会総本部の皆様、みどり会やハワイ協会の皆様、日本からハワイセミナーを共にさせて頂いた天江喜七郎団長ご夫妻をはじめ、団員の皆様、そして学校茶道招待学生の仲間にも、心より厚く御礼申し上げます。

学校茶道のメンバーは初対面の方ばかりでしたが、すぐに打ちつけ、学校での部活動のことなどについて楽しく話すことが出来ました。

「二期一会」のご縁 （茶道を通じて学んだこと）

三重県
皇學館大学三年

谷崎 恵

「国際社会に生きる日本人としての自覚」とは何か？

今回の裏千家ハワイセミナーに参加させていただくに当たり、私はこのことを強く感じた。

七月中旬、私は招待学生の一員として、ハワイに旅立った。今回のセミナーの目的に、「一盃からピースフルネスを」があり、私は最初、「日本とまったく違う気候、慣習、そして、文化の中で、いったいどのようにして平和を訴えていくのであろうか？」といささか疑問を抱いていた。しかしその疑問は、瞬く間に解消されていったのである。なぜなら二日目に招かれた、みどりの会による茶会で、ハワイの方々が和の心を持って、私たちをもてなしてくれたからである。茶道には、「ことば」というものがあり、ここでは、感謝・思いやり・合掌する心・初心・豊かな心の大切さを謳っている。日本の伝統文化である「茶道」を、みどりの会のハワイの人々がお点前や所作だけでなく、「茶道の精神」もまた、しっかりと受け継いでいることに、私は大変な驚きと嬉しき、それと同時に、これからの日本を担う次世代に、しっかりと「茶道の精神」を伝えていかななくてはならないという使命感を抱いたのである。そして、「一盃」をきっかけに人々は出会い、「一盃」をきっかけに通じ合うことが出来る、そ

れが「茶道」の魅力であることから、「一盃」をきっかけに平和を訴えることは可能であると気付いた。

現地ハワイでは、多くの人々に出会い、たくさんのことを学ぶことが出来た。困っていたときに手を差し伸べてくれた現地の人、私たちに分かるようにと日本語で一所懸命説明しようとしてくれたレストランの店員さん、いつも笑顔で迎えてくれたホテルの方々、私たちをお茶会に招待してくださったハワイ大学の方々、みどりの会の方々、そしてハワイ協会の方々、彼らは私に、国や人種、文化が違っていても、「もてなす」心というものは、世界共通であると教えてくれた。私は、この「もてなす」心とは、相手に対する「思いやり」の心と同じであると信じている。「茶道」の基本である「もてなす」心が備わっているからこそ、私達は互いに「茶道」から「一盃」を通して理解しあうことが出来るのであると強く感じた。ハワイでの自由観光の日に訪れた「パールハーバー」。そこは、現在でも第二次世界大戦の記憶が残る場所である。戦争と平和、この表裏の関係にある場所で私は、日本の伝統文化をしっかりと理解し、受け入れてくださるハワイの方々が存在することに、「一盃からピースフルネスを」の可能性を強く感じた。

私の将来の夢は英語の教員になることである。英語を学ぶことは単に語学力をつけることだけではなく、その言葉の背景を探ること、その国の文化や歴史、思想などといったものも学ぶことが出来る。そして何より、外国に目を向けることは、逆に母国である日本に目を向けることに繋がるのである。だからこそ私は、世界共通語としての英語を学ぶことをきっかけに、自分の国である日本のごとくを学び、日本の文化を伝承していく、そんな日本人としての自覚を

しつかりと持った子どもを育てていきたい。そして、日本人の誇ることのできる文化「茶道」を通して、一盃から世界へ、そして「一盃からピースフルネスを」に繋がっていけば幸いである。

「国際社会に生きる日本人としての自覚」とは？それは、自国の文化をしつかりと理解し、世界に発信していくことであり、同様に国際理解というものは異文化もしつかりと理解し、受け入れていくことにより成り立つのであると感じる。そのためには、語学力だけでなく満足せずに、日本人とは何か？自分とは何か？それを伝え合うこと、そしてその「伝える」力を伸ばし、積極的に相互理解を図っていくことが必要なのである。

二十年しか生きていない私ではあるが、それでも小さな歴史をもっているならば、今回の裏千家ハワイセミナーでの多くの方々との出会いは、本当に大きな奇跡であると思う。八日間という短い期間ではあったが、この体験は、これからの私にとって頑張ることのできる原動力にかわるだろう。皆に出会えて幸せだった。

まさに「一期一会」のご縁。これは、茶道が私に教えてくれた言葉である。

第三十八回 ハワイセミナーに参加して

京都府
同志社大学四年

目木 絵梨花

私は今回、第三十八回裏千家ハワイセミナーに参加させていただいた中でも多くの発見と感動がありました。その全てが、大学の茶道部の活動だけでは学ぶ事が出来なかつたことであり、改めてこうして勉強する機会を与えてくださったことに心より感謝いたします。

ハワイセミナーを通して学んだ中で最も大切だと思うことは、一盤を通して世界中で茶道を学ぶ方々と出会えたことです。これまで茶道を学んできた中で、海外からのお客様にお茶を差し上げる機会は何度かありましたが、茶道を学ぶ者同士として出合い、また自分が客として海外の方からお茶をいただいたのはこのセミナーが初めてでした。そのため、セミナー中に行われたどのお茶会もとても印象深く心に残っています。その中でもとても驚いたのは、彼らは、私がかれまで出会った誰よりも熱心に茶道に取り組み、どんな些細なことにも興味を持って研究をしているということです。例えば、お茶席で使用する和菓子は外国にはお店が少ないために、ほとんどの場合亭主が手作りするそうです。今回もすべてのお菓子が手作りで、グアバ味の菓子などハワイらしいものもたくさんあり毎回どんなお菓子が出てくるのかとても楽しみでした。このように、その土

地らしさをどのように表現できるかを研究すると同時に、和菓子が日本人の生活にどのように係わってきたのかなど歴史についても研究するのだそうです。こうした歴史を学ぶことで茶席に合った和菓子を作ることができ、さらに深く茶道について理解することができるといいます。こうしたことは、私たち日本人にとってはとても身近で当たり前のものであるために、改めて注目し研究する機会はなかなかありませんでした。しかし、当たり前のものとして受け流している中にこそ茶道の本質があるのではないかと私は思います。こうした、どんな些細なことにでも興味を持って取り組むという姿勢は私たちが茶道を学ぶ上で大切なものであり、見習うべきことだと思います。

また、茶道を学ぶ環境の違いにもとても驚きがありました。外国で茶道を学ぶ時には、日本のように必要なものを扱うお店がほとんど無いためとても苦労されているそうです。例として挙げた和菓子など手作りでできる物は自分たちで作り、お茶、お道具、着物などは日本に来る際にまとめて手に入れるようにしているといえます。しかし、お茶などは量がどうしても限られているために、濃茶のお稽古の時はココアを代わりに使うなど工夫をしてお稽古をしているそうです。そんな中でも茶道を続けられるのは、「茶道を学びたい」という気持ちが強いからだと彼らと交流をする中で感じました。この初心を忘れなければ世界中どんなところでも茶道を学ぶことができると改めて気づくことができました。

このように世界中で茶道を学ぶ方々との交流を通じて私たちの置かれていた環境の有り難さを感じると同時に、その環境をもう一度見つめ直すことの大切さを学びました。

また、このハワイセミナーに参加した日本で同じように茶道を学ぶ学生・生徒たちと出会うことができたのもとても良い経験になりました。以前、青年部全国大会の記念茶会でお茶の水女子大学と合同で亭主を務めさせていただいたときに、関東と関西それぞれの環境の違いにとっても驚き、新たな視点を持つことができたのですが、今回は全国各地で茶道を学ぶ学生・生徒と交流することができて、さらに視野を広げることができました。また、セミナーやさよならパーティーでの出し物の準備など一緒に行動していく中で、同じ日本でも同じように茶道を学ぶ同じ年代の仲間として強い絆を結ぶことができました。一緒に過ごした期間は短かったです、たくさんのごことをお互いから学び合い、成長する事ができたと思います。こうした仲間が日本中にいるということを嬉しく、またとても心強く思います。

このハワイセミナーでは日本全国や世界中で茶道を学ぶ仲間たちからとても多くのことを学びました。このことを胸にこれからもより一層お稽古に励んでいくと共に、大学で茶道を学ぶ仲間たちにもしっかりと伝えたいと思います。

—ハワイセミナーで学んだ「絆」—

兵庫県
神戸女学院大学四年

福永祥子

—参加前まで—

第三十八回ハワイセミナーの招待学生に選ばれることになり、とても大きな嬉しさが込み上げ、参加するまで毎日ワクワクしていました。それと同時に今までの私自身の茶道生活について振り返ったとき、「本当に私が学校代表として行っても大丈夫なのだろうか：」「大学に入学してから茶道を始め、何も分からないまま恥をかかないだろうか：」という不安もありました。

また、招待学生・生徒のみ参加前のオリエンテーションがありました。私が、私は就職活動と重なり参加することができなかったのですが、他の招待学生・生徒とは当日に空港や現地で会うことになっていたので、「八日間もあるけど、他の仲間と仲良くなれるだろうか：」という不安も抱き、参加当日まで期待と不安が入り混じっていました。

—初日—

空港や現地で仲間の方々と初めて会い、とても緊張していました。今回は大学生七名（男性一名、女性六名）、高校生六名（男性二名、女性四名）が招待され、名前を覚えるのが大変だと思っていました。が、すぐに皆と仲良くなり自然と名前も覚えていました。

ハワイに着いてすぐに結団式がありました。そのとき、今回招待

してくださった大宗匠様が登場され、一気に空気が明るくなり参加者全員が大宗匠様に注目している瞬間を今でも鮮明に覚えてます。その雰囲気の中で緊張していると、大宗匠様が私たちのテーブルに来てくださり、学生全員の体調を気にかけてくださりました。その後、ハワイ出張所の中にある茶室「汎洋庵」でみどり会四十周年記念茶会に参加し、初めて海外の方々が着物を着てお点前されているのを拝見し、私たち日本人より日本や茶道を愛していることを肌で感じました。

—セミナー一日目、二日目—

ハワイ大学で講義を受けました。みどり会OBのジャネット・池田博士からは、「茶の湯を勉強することで全てのものの見方が変わる」ということを教えていただきました。ジャネット・池田博士にとって日本は龍宮城のようで、玉手箱の中には茶の湯の精神が込められているとお聞きし、日本で茶道を学べる環境にいる幸せを改めて実感しました。

また、実技研修では且座と続き薄茶を学びました。花月のお点前では、濃茶を点てた亭主に対し半東が「お疲れ様」という気持ちで薄茶を出すというのを初めて知り、とても有意義な時間を過ごせました。

セミナー二日目にはハワイと日本について学び、特にハワイの歴史については初めて知ることが多く興味深かったです。

ハワイ協会との交歓茶会、ハワイ大学茶道部との交歓茶会が行われ、それぞれ本席と立礼席でお茶をいただきました。ハワイならではのお道具を拝見することができました。

—大宗匠様ご主催の晩餐会、さよならガーデン・パーティー—

晩餐会では、ハワイ協会の方々やハワイ大学茶道部の方々とも交流できる場でした。晩餐会が始まる前、大宗匠様は、私たちにお声をかけてくださり一人ひとりと写真を撮ってくださいました。また食事の途中にフラダンスが披露され、大宗匠様は私たちを呼んでくださり一番前の一番近い場所で見せてくださいました。

最後の夜、ブレイカーズホテルでさよならガーデン・パーティーが行われました。毎年恒例でパーティーの途中に学生・生徒による出し物を披露することになっていました。私たちは、ハワイに来る前に披露する曲を「世界に一つだけの花」に決めていたので、その音楽に合わせて大宗匠様への感謝の気持ちとハワイセミナーで学んだことを台詞にし、その後振り付けと共に歌を歌い発表することにしていました。毎晩部屋で練習し、発表ギリギリまで練習し続けました。本番では、パーティーに参加していた全員が注目してください大宗匠様も一緒に踊ってくださいました。出し物が終わった瞬間、安心と感謝の気持ちと明日帰るといふ寂しさから涙が出てきました。また、パーティーが終わった後、大宗匠様が私たちの手をとってください、みんなで輪になって大宗匠様から星の話や命の大切さの話をお聞きしました。

—最後に—

このハワイセミナーに参加でき学んだことや大宗匠様への感謝の気持ち、またハワイセミナーで体験したことや玉手箱の中に大切に入れておきたいと思います。そして、「縁」「絆」など大切に生きていこうと思います。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーに参加して

福岡県
九州産業大学四年

真田昇

私はこのセミナーの参加が決まった時、大変うれしく思いました。しかし、友人から「日本の文化なのになんでハワイなの？」という問いに、私は何も答えることができませんでした。

ハワイに行く飛行機の中、大きな不安と窮屈な座席が相まって全く寝むれず、ホノルル空港から結団式の会場までのバス移動中に疲労がたまっていたせいか、いつの間にか眠りに落ちてしまい、気がつけば会場でした。「こんな状態でやっていけるのだろうか」と不安が大きくなってしまいました。そんなとき大宗匠様から「よく来たね。楽しんでいきなさい」という言葉をいただき、それまでの不安が小さくなり、ガチガチに狭まっていた視野が広がっていく感じがありました。

本セミナー中の交歓茶会で私たちは大宗匠様と同じ席に入らせていただきました。その時の大宗匠様の形容し難い大らかさに感動しました。その次の席で私が正客を務めさせていただいたのですが、声が震えるほどに緊張してしまい、とても自分を小さく感じました。しかし、この経験を生かし「形」の稽古だけでなく、「心の在り方」も学んで行けたらと思います。

ハワイの方々が催してくださった交歓茶会では驚きの連続でした。

まずお菓子ですが、手作りだったということ、ハワイならではの材料で作っていたということ。見た目は日本にもありそうなものでしたが、味や食感が異なり、お菓子だけで十分楽しむことが出来ました。又、お道具は、棗にベネチアングラスを加工したものや、椰子の実で作られたとても軽いお茶碗など、見たことの無いものばかりでとても新鮮でした。

このように、日本の文化でありながらも見事にその風土と融合することのできる茶道は偉大だと思います。

講義は大宗匠様、ジャネット・池田ワシントン・アンド・リー大
学准教授、ジョンサン・オツソリオ・ハワイ大学教授、ジェラルド・
フィン・イースト・ウエスト・センター教授によって行われ、ハ
ワイの成り立ちや歴史などを教えていただきました。中でも印象に
残っているのは、開講の辞で大宗匠様が言われた、「茶道の意義を考
えなければいけない」と言う言葉です。茶道の事に限らず私は今ま
で「意味」を考え、理解する。それだけで終わっていたように思
います。しかし、「意義」を考える。ただそれだけで物事に対する見方
が大きく変わります。似たような言葉ですが、「意味」とは言葉や事
象の具体的内容を指し、「意義」とはそれらを理解した上でどういっ
た影響があるのか、といった違いがあります。この考え方を軸に、
これからは茶道のことだけでなく、すべての物事に対し意義を考え
て行こうと思います。

そして、あつという間に、気がつけばさよならパーティーの日に。
このパーティーでの出し物のため、ほぼ毎晩個性豊かな仲間たちと
共に楽しく、賑やかに練習してきました。そのかいあって、私たち
の出し物は笑いと拍手の中、終えることが出来ました。その中で私

は「これでもう終わってしまう」そんなことを思い、若干涙ぐんだのを覚えています。

パーティーも終盤に差し掛かったとき、大宗匠様が私たちにお話をしてくださいました。

戦争の悲惨さや仲間を失ったこと。授業などで話は聞いていても、戦争を実際に体験した方の言葉の一つひとつの重み、そして平和への願いが深く、現実にはそれはあったのだと改めて感じ言葉が生まれませんでした。お話はそれだけでなく、仲間の大切さも教えてくださいました。その中でも強く印象に残っているのが、「この出会いは生まれたときから決まっている。だから君たちは兄弟なんだ。これからもこの出会いを大切に下さい」と言っていたことです。

このハワイセミナーではお茶を通じて多くの方と出会い、国境を越えた絆を得ることができました。特に毎晩共にさよならパーティーの出し物の練習をした仲間の絆は深いものになったと思います。これからもこの絆を大切に、そしてより深いものにして行けたらと思います。そして、このセミナーの思い出は一生の宝物になりました。この宝を胸にこれからの人生、精進していきたいと思えます。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった大宗匠様、御家元様、私たちに何かと気を配ってくださいました弘田先生、また様々な場面でお世話になりました皆様に深く感謝申し上げます。そして、この思い出を共に築いた各大学、高校の仲間達にこの場をお借りしてお礼を申し上げますと思います。

本当に、有り難うございました。

第三十八回 ハワイセミナーに参加して

埼玉県
狭山ヶ丘高等学校二年

福田 泰史

今回のセミナーの参加が決まり、オリエンテーションのため、京都に向かう新幹線の中で、どんな人たちが来るのだろうか、少し不安になりました。いざ、集合してみると皆自分よりはるかに落ち着いてぴしっと座って資料を読んでいたもので、本当に自分はこの来て大丈夫だったのだろうかと思えました。緊張している中で強く印象に残った担当の方の言葉は、「なぜ大宗匠様がご自身のポケットマネーで、青少年の方たちをハワイに連れて行くのか」というものでした。自分はこの一言で、参加する責任の重さを感じました。

その後、利休御祖堂を参拝させていただき、また兜門・露地・咄々齋など、どれも長い年月が積み上げた厳かな雰囲気を感じました。普通の高校生である自分が目で見て、現実として味わうことが出来たというだけで、このセミナーに参加できて良かったと思えました。

日本を出発してハワイに着きました。選ばれた日から、不安な気持ちを持ったままだったのですが、その気持ちをどこかに飛ばしてくださったのが大宗匠様でした。空港から直接結団式の会場に向かったのが、皆正装をしているものだと思っていたら、大宗匠様はアロハシャツで登場、あまりのことでビックリしてしまいました。

それと同時に不安と緊張感がどこかに行ってしまいました。

私が「ハワイに来た」と実感したのは月です。なぜなら、月の欠け方が日本を発つ前に見たものと違っていたのです。そのことを周りの人に言ってみたのですが、「そうか?」「当たり前じゃない」と言われてしまい、人によってその時その時で感じるものが違うということを学ばせてもらいました。

次の日のみどり会四十周年記念茶会は、生まれて初めての正式なお茶会だったので、日本から来られた方々の動作、亭主と半東のお姿から、お各としての心得を学ばせていただくことができました。

そしてお茶会が終り、亭主の方から、セミナー参加者に蓋置のお土産がありました。「これは私達とあなた方、そして世界を繋ぐ橋です」と言われ、大宗匠様が掲げる「一盃からピースフルネスを」という言葉がこのことなのではないかと思えました。

ハワイ大学でのセミナー「開講の辞」で大宗匠様は「自分達の点てるお茶が相手の心に通じるものでなければいけない」というお話をされました。

今までどのように考えてお茶を点てていなかったのが恥ずかしくなり、次の稽古からそれを念頭においてお茶を点てようと決心しました。

その後、みどり会OBのジャネット・池田博士から、学ぶとは単独学習ではなく、「恩師」の方と長く付き合っていくということ、また、色々な思い出の「重ね」・「ご縁」・「切磋琢磨」・「初心を忘れない心」などについて教えていただきました。

そして、大宗匠様がご解説された茶道の実技は、「目座の式」で普段は薄茶しか点てないので、花を生け、炭をつぎ、濃茶と薄茶の両

方を点てるのを見てすごいなと思いつつ、茶道の奥深さを拝見させていただきました。

また、太平洋諸島の文化とネイティブハワイアンについての講義を受けました。他国の文化・暮らしを学ぶことがお茶を広げる上でも、平和を実現させる上でも必要なのだという結論に行き着きました。

またハワイ協会の方々やハワイ大学茶道部との交歓茶会の席にも参加させていただきました。これらのお茶席で使われた道具は現地の方が作ったものが多く、ガラスの水指や石で作った棗など日本では使われていない独特の美しいものが多く、国が違くと色々な発想があつて面白いと思えました。

日本から遠く離れたハワイで楽しく過ごすことができたのは招待学生・生徒のお陰でもあります。八日間という短い間で学校や友人の中にいるだけでは学べないことを学ばせていただきました。そうして結んだ絆は、「生涯の宝」の一つとなりました。

ハワイでの最後の夜に大宗匠様とお話する機会があり、大宗匠様が戦争体験を語られた後に「皆はここで会うために生まれてきて、そしてここで会うために待っていたんだよ」とおっしゃった時、胸に込み上げてくるものがありました。

そのようなお話を直接聞くことができ、オリエンテーションの時に担当の方に言われた言葉の意味がとても良く解りました。「私はこのセミナーの参加によって、世界を知ること大切だが、友と青春の一ページを作ることの方がもっと大切だ」と思いました。

これほど多くの体験は普通の高校生では経験できなかったでしょう。ご招待してくださった鵬雲斎大宗匠様並びに坐忘齋御家元様、

行かせていただくチャンスをごくださった学校の先生、思い出に残るセミナーにしてくださいました同行の皆様・学生の皆さん有り難うございました。このセミナーで経験したことを、今後の自分の茶道に活かしていきます。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーに参加して

静岡県
常葉学園橋高等学校二年

北詰 宜史

茶道の道を歩み始めたばかりの私が、今回裏千家ハワイセミナーに参加させていただき、茶道への考え方が大きく変わった。

日本の文化である茶道をハワイという異国で学ぶことをお聞きした時には、違和感を持った。茶道は茶室で抹茶を楽しむだけではなく、菓子も勿論、道具、花など全ての取り合わせを味わうのであり、それらの風雅な趣が日本固有の文化だと思っていたからである。

だが、ハワイでのおもてなしを受けて驚いた。ハワイの茶室は日本と変わりはなかった。菓子はグアバのお餅、花はハイビスカス、花入はフラダンスの時に使う伝統的な打楽器と南国的で明るい雰囲気にあふれていた。特に南国ハワイのシンボルのようなハイビスカスを茶花に取り入れた茶室は、日本とはまた違った新たな趣を感じさせた。その国その土地の産物を見事に日本の茶道に融合させている。茶道は日本だけでなく、世界のどこの国でもできることの証明であると感じた。

ハワイセミナーでジャネット・池田博士からこんなお話をいただいた。

日本以外の国でも、若い世代の身の回りには、電子機器があふれている。その一方で茶室は木、竹などの自然物できている。それ

で若い人が茶室を見ても、初めは変な所としか思えない。だが、いざ茶室に入ってみると以外にも落ち着くことに気がつく。茶の湯のルーツは日本にあるが、どこの国にも通じるものがある。

茶室でなぜ若い世代でも落ち着くことができるのか。世の中は時代の流れと共に、様々なニーズでスピード化が求められてきた。便利さ、早さを追求してきた結果は生活全てにおいて機械化された若い世代の生活ツールや遊び用品などが身の回りに蔓延し、それがなくてはならない人まで多い。このような道具は、家に居ながら、手軽に便利に楽しめる。そんな若い人たちを、茶会に誘ってみても返事は「ご遠慮します」。そこには二つの理由があると思う。一つは、茶席では、もてなされる側の礼儀がありその礼儀作法を知らないの、行ったら逆に無礼になり、茶道に距離をおいてしまっているという考え。もう一つは、単に興味関心がない、面倒だという考えである。しかし茶室が落ち着けると若い人も思えるのは、どんなに機械化が進んでも、一日、二十四時間の流れは、昔も今も変わらないからである。どんなにスピード短縮の時代の「動」の部分があっても、人間の心のどこかに対照する「静」の部分を必ず持ちあわせているのではないだろうか。それが知らず知らずに茶室という空間に入った時に、安らげるという気持ちの表れではないだろうか。

茶室に入ると落ち着くという感覚は、国籍、人種、世代に関係なく万国共通なのだ。しかし、なぜ落ち着くのか。それは人は誰しも争いを避け、安寧に日々を送りたいという気持ちが根底にあり作法に則れば、その希望をかなえてくれる場所が茶室だからではないだろうか。

なぜ茶道がこれほどまでに広く普及したのか、自分なりに推測し

てみた。茶道が千利休によって深められた四百五十年前は争いの絶えない時代であった。その中で世俗を超越し「わび」「さび」の美意識に基づいた茶室で一服のお茶をいただくことは、唯一の心の落ち着く時間となったのではないか。国を、自分を、立場を超えて誰でも安らぐことができる。茶道にはそんな力があるのだと思う。

今も世界では、争乱が絶えない。だからこそ茶道が必要なのではないだろうか。ハワイという地での茶道の交流の意味もそこにある。国籍、人種に関係なく、同じ茶室でお茶をいただく。茶道の精神の普及によって自分の権利だけを主張せず、お互いに歩みよることによって理解し合える。茶道は日本から生まれたが、「相手をもてなす」というグローバルな普遍性を持つ。

私はお茶を点てている時に一盃にどれほどの想いを込めているだろうか。相手のことを想い、一盃に心を込めて「もてなす」ことは自分にとって大きな課題となった。茶道を通しての国際交流となればその一盃は重みを増す。「もてなす心」「もてなされる心」から生まれる平和。まさに「一盃からピースフルネスを」である。

私はこれからも茶道を続けていきたい。そして、茶道の素晴らしさを、一人でも多くの人に、また一つでも多くの国に広めていきたい。

今回のセミナーで新たにした自分の決意を胸に、ますます茶道に精進していきたい。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーに参加して

岐阜県
県立坂下高等学校三年

所澄佳

今回で三十八回目となるハワイセミナーに参加できたことに、私
はとても感謝しています。それはこのセミナーでないと出会うこと
ができない方々とお話しができたり、ハワイでしか学ぶことができ
ない多くの事を体験し学ぶことができたからです。特に招待してく
ださった鵬雲斎千玄室大宗匠様には、講義のほか、ホテルのプール
サイド等で直接お話しをしてくださり、大変感謝しております。

このセミナーでは、数多くのことを経験・学ばせていただきました
が、私の心に特に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、「茶道は世界への架け橋」という言葉です。今年は
みどり会が発足して四十周年ということで、お茶会の後に祝賀記念
品として大宗匠様が「架け橋」と命名された蓋置をいただきました。
この蓋置には、大宗匠様の「一盃からピースフルネスを」という理
念により地球の東西南北に架けられた文化の架け橋、という意味が
込められています。私はセミナーの中で、大宗匠様のこうした理念
やみどり会の方々のもてなしの中に「茶道は世界への架け橋」とい
うことを感じることができました。例えば、私達が参加させていた
だいたお茶会では、みどり会の皆さんがタロイモを使った羊羹やオー
ブンで焼いたチチモチなど日本では食べないおいしいお菓

子を作ってもてなしてくださいました。これは、ハワイでは日本の
ように和菓子屋さんが多くないため、みどり会の皆さんが工夫され
作られたのですが、抹茶と和菓子と考えていた私には大変新鮮で、
「もてなす」ということはこういうことなんだ、と感銘しました。ま
た、道具では、棗や水指にガラス製の物が使われていて暑いハワイ
でのお茶会ならではのし、花入にもハワイの伝統的な壺型の打
楽器「イブ」が使われているなど、ハワイの文化をうまく取り入れ
ているのは、とても素敵なことだと思います。

今回、このお茶会を通じて、多くの人と交流することができたの
も、みどり会の皆さんが架け橋となって努力してくださったからだ
と思います。私も将来、みどり会の皆さんのように人々や文化を結
びつけられる「架け橋」のような仕事をしたいと思いました。

二つ目は、セミナーの中で大宗匠様が何度も話されていた「絆」
です。私はこのセミナーに参加していなかったら結ぶことのできな
かった絆をたくさん得ることができたと思います。また、大宗匠様
のお話によって「絆」の大切さや、普段いかに自分が「絆」によっ
て生かされているかに気が付くことができ、自分の視野を広げるこ
とができました。このセミナーに参加する前までは、私が進学を考
えている大学で茶道を続けていけるか不安がありました。が、セミナー
を通じて知り合った招待学生・生徒の皆さんやハワイ大学茶道部の
方達とセミナー参加の動機や茶道について話しているうちに、もっ
と茶道について学びたいという気持ちの方が不安よりもずっと大き
くなりました。「生活教養」の授業では、四規七則や利休道歌、お茶
のお道具やお花の名前、点前の手順や注意点、茶室について、歴代
のお家元、茶道の歴史、今日庵について…と勉強することが多く大

変さばかりが頭にありましたが、それは全く基本的なことばかりで、全く目の前のことにとらわれていることに気付きました。セミナーに参加している大学生や高校生の方達は、以前参加したお茶会で印象深かったことや勉強になったこと、今回のセミナーに参加することで自分の茶道だけでなく、自分自身の人生を茶道によって豊かにしたいという話を堂々と話してみえるのを聞いて、自分の狭い考え方が恥ずかしくなりました。同時に、私も高校ではなかなか行くことができないお茶会に参加したい気持ちや、お軸やお茶碗など道具についてもつと学びたいという気持ち、セミナーに参加された大学生の方のように茶道をもつと知り、それを自分の生活に生かしていきたいと思えるようになったのは、このセミナーで結ばれた絆のおかげだと思います。

このセミナーを通じて学んだことは全て、日本にいたら気付くことができなかったことかもしれません。こうした貴重な経験を残り少ない高校生活に生かし、自分自身を高める努力をし、茶道のすばらしさをみんなに伝えていきたいと思えます。最後になりましたが、今回このセミナーに参加させていただき有り難うございました。

大宗匠様をはじめ、御家元様、裏千家淡交会総本部の皆様にご心から感謝いたします。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーに参加して

兵庫県
県立加古川南高等学校二年

井手 希望

第三十八回裏千家ハワイセミナーに私たちの学校から招待されることを先生から聞きました。

部員一同話し合いの結果私に決まりました。行きたいと自ら手を挙げたもののいざ決まってしまうと、夢の様な嬉しいお話が、喜びよりも学校代表としての重責に押しつぶされそうな不安で心が揺れましたが、茶道指導者の池澤宗古先生、朝比奈宗美先生が、私の背中を強く押してください、不安な心は簿らぎ、喜びに変えられる様になりました。以後様々な準備等々、アツという間に出発の日が来てしまいました。

大きな喜びといろいろな想像を胸にハワイの地を踏みました。ホノルルでの結団式を皮切りに鵬雲斎大宗匠様主催の晩餐会を始め、その都度多くの心温まるお茶会や講演会等充実した八日間でした。それは皆ハワイならではの趣向のおもてなし、ハイビスカスのお花が見事な存在感でお床に飾られており、お菓子も当地ならではのフルーツを使って一つひとつ心を込めて手作りしてくださいました事が伝わって来て、さすがと実感し、ハワイのお茶の入口に立つ事が出来ました。講演はハワイ大学で多くの教授の先生方の講義が、私の心の中の奥までしみ込んで行く様な、貴重なお話ばかりでした。

中でも大宗匠様は「All together」という言葉を説明してくださいました。これは「自分だけが辛いとか悲しいとか思わず、悲しい時は皆一緒と思えば良い。そんな時は空を見上げなさい」と教えてくださいました。

一番感動して心に残ったお話は大宗匠様が戦争で体験されたお話でした。一言一言命の尊さが心に響き涙がこぼれてきました。

大宗匠様にはその体験があったからこそ、このハワイを始め全世界に平和の願いを込め、茶道を広めるために活躍されている深い深い意味が理解できました。

また、ハワイは私達は観光地として、のどかな平和な地と思っていました。実はハワイにも歴史や文化について抱えている問題があるようで、一つはハワイ原住民が減少して消えて行くのではと懸念され、大宗匠様も大変危惧されて応援されている事を知りました。帰国してまず感じた事は、日本には四季というすばらしい自然があり、その中で日本の茶道が育くまれ、私達が受け継がれている事に深い感動を覚えています。

こんなに多くの事を学ばせていただいた、すばらしいセミナーに数少ない招待者の中に私を加えてくださった事に改めて感謝致します。

この日本の「茶道」を次代に伝えて行く様、私の出来る方法で少しずつでも後輩に伝えながら私自身もいつも先生に教わっている「心のお茶」を改めて思い返し、少しでも成長して、お役に立てる茶道人になれる様、努力して行きたいと思っています。

そして私にはもう一つうれしい事がありました。

それは、ハワイ大学の学生さんと、招待された大学生と高校生の

仲間は、このセミナーに参加する事で、出会う事が出来ました。皆さんとても優しく親切にしてください、仲よくなる事が出来、私の宝物となりました。

このセミナーのために細やかな心遣いでお世話してくださいました日本とハワイの皆様方、それに淡交会の先生方からも温かい心をいただき、光栄なことで感謝しています。

ご招待いただきました、鵬雲斎大宗匠様、坐忘斎御家元様に重ねて深く感謝いたします。

本当に有り難うございました。

ハワイセミナーを終えて

広島県
山陽女子高等学校三年

林 恵利世

最初は不安いっぱいでも迎えたハワイセミナーでしたが、実際はとても楽しく、あっといふ間の八日間でした。学校では体験できない貴重な体験ができ、たくさんのお話を学ぶことができました。

初めてセミナー参加のお話をいただいたとき、茶道経験が浅いけれど大丈夫かな、上手くやっつけていけるかなと正直思いました。しかし何事も経験すべきだと考え、参加することに決めました。出発前、学校の先生方から「楽しんできなさい」という言葉をいただき、固くなりすぎず自分なりに楽しもうと思い、出発日を迎えました。

初日、六月のオリエンテーション以来、久しぶりに現地で招待学生・生徒皆さんに会いました。最初はあまり馴染むことができませんでした。色々な話をしている間に自然と打ち解けることができました。結団式で参加者の皆さんの前で紹介された時はとても緊張したと同時に大変気持ち良かったです。

二日目、午前にみどり会四十周年記念茶会が行われ、とても和やかな雰囲気一碗をいただくことができました。お話を聞き、あらためて茶道は素晴らしいものだと思います。「お茶を通して出会った仲間」「セミナーで出会った仲間」「一期一会のご縁」を大切にしなければいけないと思いました。

三日目、大宗匠様の開講の辞でセミナー一日目が開講しました。

一講目はジャネット・池田博士による講義で「初心のころを大切に」など茶道をしていく上で大切な多くのことを学ぶことができました。二講目は且座、続き薄茶の実技が行われ、大宗匠様が解説をしてくださいました。両方とも初めてのことだったのでまだまだ勉強が足りないなと思いました。午後からハワイ協会との昼食会・交歓茶会が行われました。立礼席・本席ともに珍しいお茶碗・水指・蓋置を拝見させていただきました。どれも綺麗なもので感動しました。お菓子・お茶も美味しくいただくことができ、とても良い茶会でした。

四日目、セミナー二日目の講義も興味深いものでとても勉強になりました。午後にはハワイ大学茶道部との交歓茶会が行われ、心尽くしの一碗を味わうことができました。夕刻には大宗匠様主催の晩餐会が盛大に開催され、茶道を通じて出会った方々と交流を深めることができ、感動しました。本場のフラダンスも真近で見ることができ、感動しました。

五日目、自由行動ではオプショナルツアーに参加し、オアフ島を一日観光をしました。天候にも恵まれ、思う存分満喫することができました。

六日目、午前中は招待学生・生徒の全員でワイキキビーチに行ったり、ホテルのプールで泳いだりして、とても楽しかったです。夕刻は、ホテルでさよならパーティーが行われました。最後の夜ということもあり、パーティー中は寂しくて泣きそうになりましたがパフォーマンスのときには笑顔で乗り切ることができました。皆で決めたパフォーマンスが成功し、参加者の皆さんに楽しんでいただく

ことができ良かったです。全員で踊ったフラダンス、とても楽しかったです。

全日程を終えてみると、出発前にあった不安はいつの間にか消えていました。毎日がすごく充実して、楽しく過ごすことが出来たのだなと思いました。セミナーに参加する前と終えた後では、茶道に対する気持ちはかなり変わりました。大学に進学しても茶道部に入り、もっと勉強して極めていこうと強く思うようになりました。

帰国後に部活動があり、その時「出発前と目が変わった」と言われました。先生方に「これから茶道を続けていきたい」とお話ししたら大変喜んでくださいました。自分で決めたからには中途半端にならないように努力していきたいと思えます。

今回、セミナーに招待していただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。セミナーに参加できたおかげで生徒の内に貴重な体験をすることができ、やりたいことが見つかりました。今回学んだことを今後にしつかり生かしていきます。また機会があれば、是非ハワイセミナーに参加したいと思っています。本当に有り難うございました。

第三十八回 裏千家ハワイセミナーに参加して

高知県
土佐高等学校三年

前岡 春香

このハワイセミナーのお話をいただいてから、ずっと私なんかで良いのだろうかと思っていました。当校では初めての招待という事もありますし、万が一お茶席で不手際があったり、他の参加者の皆さんと馴染めなかったらどうしようかと不安でした。

しかし、その不安はホノルル空港に着き、一般参加の皆様にもお声を掛けていただいたりして皆さんとお喋りしているうちにいつの間にか不安もすっかりなくなりました。皆さんと打ち解けてきたところで次の日からはお茶席や講義といった、このハワイセミナーのメインイベントに参加しました。

私が、このセミナーに参加させていただいて思ったことはやはり「二期一会」です。

そして茶道という繋がりで結ばれている大きな人の輪でした。ハワイでは、たくさんのお茶席に参加させていただきましたがどのお茶席も本当に素晴らしく、そしてそこでしか出会えない方々に出会う事ができました。

お道具の取り合わせなどもハワイ独特で珍しいものばかりで、お茶席に入る度に感動していました。特に感動したのは、二日目に行われたみどり会のお茶席です。亭主や半東の方、お運びの方々も皆

さん外国の方で、最初はびっくりして珍しいなあと思っていましたがお道具の説明の日本語もしっかりとしていらっしゃるし、立ち居振る舞いも皆さん着物なのに日本人のように、むしろ日本人よりもしっかりとした身のこなしでした。私のところにお茶碗をひきに來てくださった方も流ちょうな日本語で「おさげいたします」と仰り、それを見た時に私は茶道とは世界に広がる総合芸術なんだなと心から感じました。

お道具もまた外国のものばかりでしたが素晴らしく、外国にしかない木を使って作られたお棗や外国の陶芸家の方たちが作られたお茶碗の数々、蓋置の「架け橋」、中でもお茶杓の御名が「友達の輪」だったことにとても感動しました。このみどり会四十周年の節目のお茶会にふさわしく、さらに記念品としていただいた蓋置を私達が持ち帰ることでその友達の輪が繋がっていくんだなあと思いました。

また別の日のハワイ大学でのお茶会でもベネチアングラスのお棗やガラスの水指、またお花がレイであったり、手作りのパイナップルのお菓子、ハワイの道を歩くとよく見られたレインボーシャワーのお花を模った素敵なお菓子などハワイらしいお取り合わせをたくさん見ることが出来ました。特に立礼席では大宗匠様と同席させていただき、そのお席の花入が実はハワイの伝統的な楽器でありそれをアレンジしてお花を生けているというお話などをお聞きすることができ、すごく緊張しましたがとても心に残っています。

そして、ハワイ大学での講義で大宗匠様がされた実技のご解説も私はどれも見たことがないものばかりでとても勉強になりました。大宗匠様の「型はあるけれどそれを場面によつて変えてゆかねばならない」というお言葉が心に響きました。茶道とは、そういった柔

軟性も大事なのだなあと思いました。解説には知らない専門の用語がたくさん出てきて、漢字すら分からず大変でしたが、これから学ぶ事が増え、とても楽しみです。

八日間という長いようで短い間でしたが日本で生活していたなら絶対に出会えなかった方々と出会う事ができ、本当に幸せな体験をさせていただくことが出来ました。

皆でさよならパーティの出し物の話し合いをするときや、行動する時など、大学生の皆さんが率先して私達をまとめ、またいろいろなところへ連れて行ってくれたり、本当に有り難かったです。八日前は他人同士だったのに一から関係を築くのは大変でしたが、皆さんの優しく人を気遣い、譲り合える心のおかげで他人同士だったとは思えないほど仲良くなる事が出来ました。このセミナーで得たものはたくさんありますが、この素晴らしい友人、先輩方との出会いも私の宝物となりました。

このセミナーで学んだ、相手のことを思いやり、おもてなしをするという心を茶道の場のみならず、実際の生活でも活かし、諸先輩方のような、素晴らしい大人になれるよう精一杯精進していこうと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な経験を与えてくださり、ハワイでも私達に優しいお言葉をおかけくださいました大宗匠様、御家元様、なにかと私達をお気遣いくださった先生方、未熟な私達をサポートしてくださいました淡交会総本部のスタッフの皆様、ハワイでお世話になりました全ての方々々に御礼申し上げます。

本当に有り難うございました。